

仮借については、すでに前の章で述べたやうに、「仮に借りる」といふ用字法である。“転注”も、ある意味では“仮借”と言へないこともない。例へば、“楽しい”といふ意味を表す固有の文字が作れないので、“音楽”の“楽”といふ字を借りて“たのしい”といふ意味を表したのだからである。

然し、これを“転注”と言って“仮借”と区別してある訳は、意味につながりがあるからである。“仮借”は、意味に全くつながりがない。ただ、発音が同じであるか、もしくは似てゐるからといふ事を頼りに借りる用字法である。

チョムスキー以前の西欧の学者たちは、文字は“表意”よりも“表音”が大切だと言ふけれども、“表音”は手段であり、“表意”が目的であることは、“意味”につながりがあるのを“転注”と称し、“発音”につながりがあるのを“仮借”と称してゐることで知られる。

意味につながりがあれば、「仮の借物」ではなくて“転注”と言ひ、意味につながりがない時に「仮の借物」だと言ふのである。発音のつながりは、意味のつながりに及ばないことがよく解る。

さて、“仮借”は、ある言葉を表すための固有の文字がどうしても作れ

ない場合に、仮の便法として使はれる用字法のことであるが、字画が複雑な場合に、もっと簡単な同音の文字を仮借する、といふこともあり、また、その逆の場合もある。

例へば、“后”を“後”の意味に用ひるのや、“舍”を“捨”の意味に用ひるのは、私たちにもよく解るけれども、“是”の代りに“謚”といふ字を使ふのや、“欠(缺)”の代りに“闕”といふ字を使ふのは、文章を重厚にするためだとは思ふけれども、私たちにはちょっと理解し難いことである。

また、“伸”の代りに“信”といふ字を用ひるに至っては、私には全く理解できない。この類の仮借が、中国の文章では実に多くある。わが国ではこれを“当て字”と称して、“誤字”に扱ふところであるが、中国ではこれが堂々とまかり通つてゐるのである。

もっとも、わが国でも、“信子”や“信長”などのやうに、人名では“のぶ”と読んでゐる。これは“同音”のよしみで“伸”の訓を借りたものであり、やはり、仮借の類と見るべきものであらう。

また、“壹・弍・参・伍・拾”なども、“一・二・三・五・十”の仮借である。これは数字を改竄する恐れがある場合、それが出来ないやうに、わざと複雑な漢字を仮借したものであつて、これなどはよく解る。

もう一つの仮借は、外国語を(意味に関係なく)発音通りに写す場合

## 日本語の再発見

である。翻訳できる外国語は翻訳するのが普通であるが、翻訳できないものは仮借するほか方法が無いので仮借する。然し、外国の地名や人名などの固有名詞は、その意味が翻訳できても、仮借によって表現するのが普通である。

“英吉利斯”“仏蘭西”“伊太利”などの表現がこの例である。わが国では、カタカナといふ文字があるので、“イギリス”“フランス”“イタリー”と簡単かつ明瞭に表現できるので有利である。然し、“英国”“米国”とか、“英・独・仏”とかと、略称する場合には、カナよりも漢字を仮借した方が解り易く便利である。(例へば“イ”では解らないが“伊”だと直に“イタリー”と解る)